第45回 企画展

吉野川と阿波藍

入場無料

展示期間

平成24年
10月23日(火)
▼
平成25年
1月27日(日)

休館日

毎週月曜日・毎月第3木曜日、月曜日が祝日にあたる場合翌日（12月25日・1月15日）、年末年始（12月29日～1月4日）（祝日は開館日です）

展示解説

第1回 平成24年11月25日(日)
第2回 平成25年 1 月 6 日(日)

展示場所

徳島県立文書館 2階展示室

第27回国民文化祭・とくしま2012 特別協賛事業

あっ!わあ 発見伝 DISCOVER AWA-STYLES

第27回国民文化祭・とくしま2012 The 27th National Cultural Festival Tokushima

文化の森総合公園 徳島県立文書館
Tokushima Prefectural Archives

ごあいさつ

今回の企画展は、現在、開催中の第二十七回国民文化祭の特別協賛事業としても位置づけられておりますが、「吉野川と阿波藍」をテーマに取り上げました。いうまでもなく阿波藍は徳島の特産物として代表的な存在であり、前回に続き国民文化祭でも四大モチーフのひとつとして取り扱っています。

さて、江戸時代以降、明治中期にかけて徳島の経済を支えた特産物である藍の主産地は、「阿波の北方」と呼ばれた吉野川の中・下流域でした。この地域は、大河がありながらその水を利用できないという、当時の灌漑技術上の制約から稲作が行えませんでした。その反面、藍作にとっては有利な自然条件を備えていたといえます。たとえば、流域の農民に多大な被害を与えてきた洪水は、藍作に適した砂質土の平野を形成し、毎年のようにおこる氾濫は、その都度、上流から客土を中・下流域の藍作地に運んできたため、藍の連作を可能にしました。それに徳島藩の保護奨励政策、木綿の普及と染料としての需要の拡大、さらに、栽培技術の改良もあり、全国の市場では阿波藍の流通が支配的となり、全国各地に高品質の藍を供給することになりました。

今回の展示では、吉野川と藍に関する、江戸時代から明治にかけての古文書や絵画、絵図、さらに写真などの資料から、藍の栽培、生産、流通についての当時の様子を具体的に紹介します。また、「四国三郎」とも呼ばれ、名だたる暴れ川であった吉野川の、堤防が整備される以前の姿についても絵図などの資料からご覧いただけるよう展示いたします。

今回の企画展が、ふるさと徳島について学ぶ機会になると同時に、伝統をふまえた新たな街づくり、地域の活性化の一助になることを願っています。

末尾ながら、今回の企画展の開催にあたり、貴重な資料をご提供いただいた関係者の皆さまに心より厚くお礼を申し上げます。

平成二十四年十月二十三日

徳島県立文書館長　結城孝典

表紙の絵

「藍田灌水の図」

大原呑舟　画　玉潤　賛

（阿波市立吉野中学校所蔵）

名西郡覚円村（現石井町）の藍師である大磯次郎兵衛が、阿波国内で多くの絵を残している画家、大原呑舟（？～安政四年（一八五七））に描かせた絵に、京都生まれで助任興源寺の僧、玉潤（ぎょくかん　明和八年（一七七一）～安政三年（一八五六））に賛を請うた作品。天保癸卯（一四年、一八四三）冬と入れられている。

見渡すばかりの藍畠の右手には、石垣の土台の上にたくさんの蔵を並べた藍屋敷、左手には船を浮かべた大河吉野川、遠くは阿讃山脈の山並みが見える。

藍作の仕事は、荷運び・害虫駆除・雑草取りと苦労の連続だが、中でも灌漑は最も厳しい仕事である。藍作地帯独特の灌漑用具である跳ね釣瓶（獄門ともいう）を使った藍畠への灌水を描かせたのは、子孫へ創業の苦労を知らしめるためと賛にある。

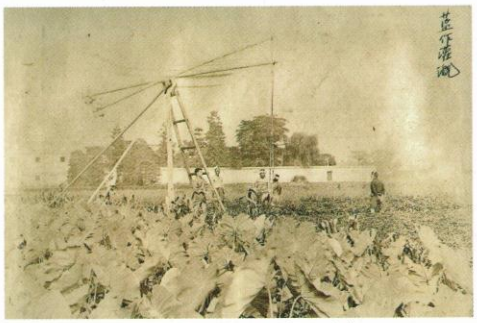
「藍作一所」の吉野川中下流域

国文学研究資料館所蔵の蜂須賀家文書のうち天明四年（一七八四）に書かれた「京都藍問屋一巻」には、阿波国の産物である藍玉についてこのような記述がある。

吉野川中下流域の「名東・名西・麻植・板野・阿波」五郡の平野部においては用水を引くことができず、田による稲作ができないため「藍作一所」となっており、年貢は全て藍玉を売った銀で支払ってきました。

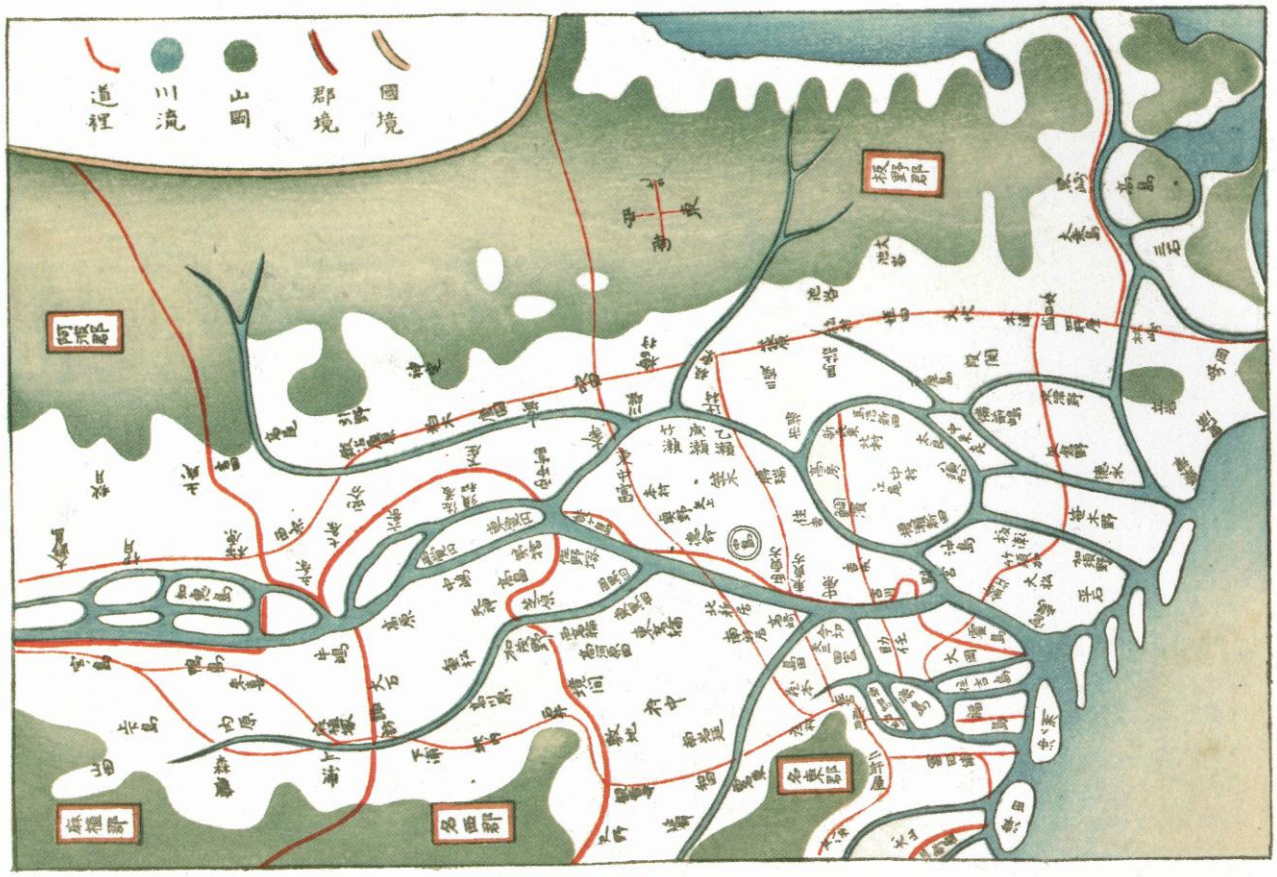
吉野川中下流域の五郡の村々は、当時の技術で吉野川を制御できないため用水が引けず、「藍作」だけが行われた土地になっており、年貢も全て藍玉の売上金で上納された。こうした地域にとって吉野川は、毎年のように洪水を起こす暴れ川でもあった。遊水池や霞堤などを作りながら何とか川の制御をしようと試み続けたようだが、江戸時代の土木技術ではまだまだ押さえ込むにはほど遠かった。

特に現在の吉野川と旧吉野川に挟まれた地域などでは、元々村のほとんどの土地が畠地であった。江戸時代後期には適作とも言える藍を作ることが地域の繁栄を産みだすこととなり、さらに一面藍畠となるほど広がっていったのである。



藍作灌漑（志摩家文書）

藍圃（志摩家文書）



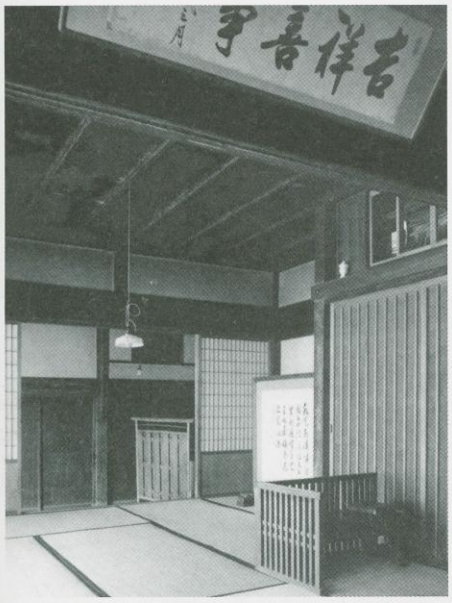
藍作地方の図（『阿州産藍之説』より）

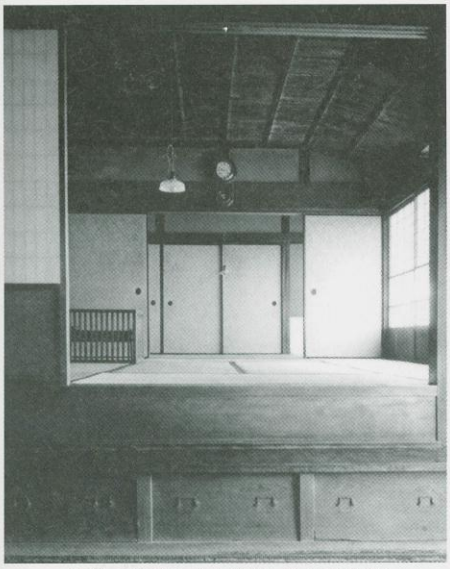
藍屋敷

徳島の風景のひとつに豪壮な藍玉師の家がある。多くは石垣の上に立てられ、広い中庭と、大きな藍の寝床と呼ばれる蔵のような建物が建ち並ぶ。こうした家は単なる人の住む家ではなく、葉藍から染料製品としての藍玉を作る工場のようなものでもあった。

刈られた葉藍は、細かく刻まれ、庭いっぱいに広げられ乾燥される。乾燥後は寝床へ運ばれ水を懸けながら切り返しを行い藍建菌による発酵をさせていく。この発酵過程がなければ紺色の染料である藍の色は生まれない。こうした作業は十五回～二十回にも及び、発酵過程で高温となるため大量の藍の切り返しや灌水は大変な重労働であったといわれる。こうしてできたものが蓼（すくも）である。蓼は染料としては完成品であり、そのまま流通することもあったが、国外などに運ばれるときは、藍砂などを混ぜて突き固めた藍玉として流通することが多かった。

こうした藍玉づくりは広い庭や、雨風のしのげる寝床がなければ為し得なかった。さらに、完成した藍玉の売り買いをするため母屋には帳場や応接の部屋などもあった。これに主人一家、使用人などが生活するスペースを含めてひとつの藍屋敷となるのである。

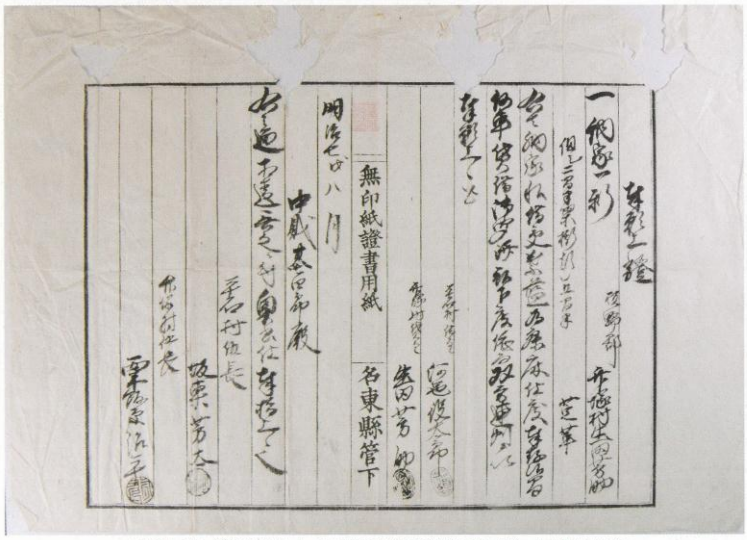




盛家の帳場（上野時生氏撮影）

志摩家屋敷　全体（志摩家文書）

志摩家家相図（明治期）（志摩家文書）



奉願上証（藍寝床として使用の納屋貸借の件届）中財家文書

志摩家の門 （志摩家文書）

藍作一辺倒の光と影

寛政二年（一七九〇）七月の郡代報告書「阿波麻植両郡一昨年以来相手懸候御用方申上帳」（蜂須賀家文書）は、藍作を盛んにしている麻植郡の状況を次のように述べている。

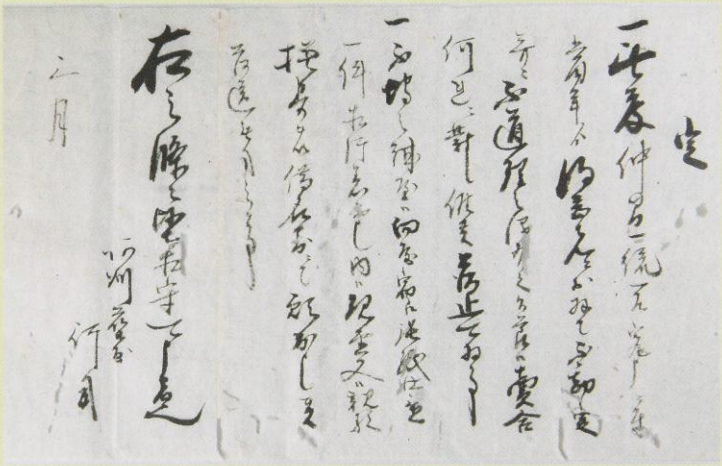
麻植郡では、藍作を第一にして国益をあげている。しかし、風儀がよくない。藍作ができない田畠は甚だ粗抹に取扱い、他の作物の生育が見込まれる所でも荒らしてしまう状況である。中小の百姓の多くも藍師のまねをして、保有田畠が少なく困窮にもかかわらず表面を飾り、葉藍問屋・走り問屋などと唱え、葉藍売買を専らにしている。自分保有の田畠の耕作は片手間にし、身分不相応の金銀を取扱い、葉藍ができるだけ高く売れるように心懸ける。葉藍値段が高い時は利潤が多いので、葉藍売買に専念しがちになる。それゆえ、自然と生活などもぜいたくになり、衣類も身分以上に華美になっている。しかし、葉藍値段が悪い年には、わずかの田畠も質入れ・売却を余儀なくされ、家督を失うはめになっている。一方、富農の者共は、右の田畠の質入れ・売却を見込んでいる風潮もあり、「前貸し支配」という不誠実なやり方で小百姓の田畠を取り込み、余裕をもって手広く商売に手を伸ばす者もいるような次第である。

このように、阿波では藍作が盛んに行われ、藩益に大きく貢献する一方、農村においては、藍作をめぐって中小の百姓の浮沈が激しく、富農が中小の百姓の土地を集積し、より富裕化し、広範に商売を展開する状況であった。

代金回収に取り組む阿波藍商仲間

越後国に売場を持っていた板野郡竹瀬村（現藍住町）の藍商木内家は、天保飢饉による販売不振と売掛金の未回収に苦しんでいた。木内家文書に残されていた店員からの報告書によると、同じ悩みを抱えていた越後売場の阿波藍仲間一統は、「不勘定」「不道理」の紺屋へは藍玉を一切出荷せず、「不埒」の紺屋の名前を問屋宿へ張り出す。阿波藍仲間からは一〇両宛集めて、裏切った者からはこれを没収する、といった取り決めを行ったことがわかる。

江戸時代、全国の市場に進出していた阿波藍商たちは、享和三年（一八〇三）の関東売仲間を皮切りに、各売場（販売エリア）ごとに仲間組合（売場株）を結成していった。阿波藍商による市場の独占や仲間相互の過当競争の防止などとともに、悪質な紺屋への対応も売場株の重要な役割であったことがわかる史料である。



夢の吉野川治水

四国三郎・吉野川は治水事業の難しさゆえ天下の暴れ川として有名である。吉野川の水を治めることは長い間、住民の夢であった。そんな夢を描いた建白書が『芳野川御普請愚考書』である。吉野川は護岸が脆弱であり、南北へ大きく蛇行し、水の流れが堰き止められ氾濫が起きると指摘されている。そこで、「今吉野川ヲ岩津より東シ海辺迄直ニ被遊候ヘハ」と河川を真っ直ぐに改修すれば、「出水」の力により自然と堤防ができ、新たな新田が開発できると建白している。一方で、この吉野川の氾濫は上流の土砂を藍作地帯にもたらし、豊かな藍作地帯を作り上げたといわれる。しかし、この氾濫が甚大な被害をもたらせたのもまた事実である。『芳野川御普請愚考書』には「座上二三尺も入水仕候時ハ牛馬等も内庭或ハ座敷等へも引上申候、座上之床ニハ諸道具或ハ老人小児等ヲ上置候而達者成ル者共ハ畢竟水中ニ而水ヲ相守り申候、腐座板ハ踏貫腐座竹ハ浮上り朽壁ハ水ニ被押抜、雪隠も井も竈も仏壇も一ツニ相成申、寔ニ悩シ共鬱陶シとも言語に絶シ申候」とその厳しい状況が記されている。この吉野川の流れを真っ直ぐに改修し、下流にいち早く水を排出しようとする計画は、近代の河川改修とも相通ずるものであり、当時としては極めて先見性を持った主張といえよう。この建白は文政七年（一八二四）十一月と天保十二年（一八四一）の二回提出されているが、いずれも却下されたと思われる。河川改修の具体的な手法には多くの課題もあるが、吉野川の治水を成し遂げ、新たに新田を開拓し地域住民の生活の安定を図ろうとするこの愚考書（建白書）は、当時の吉野川流域住民の願いであったといえよう。

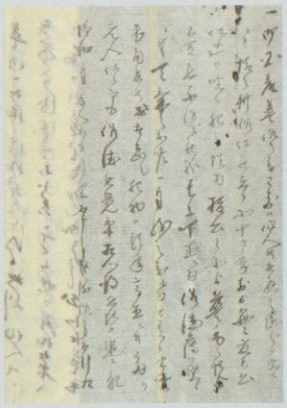
『芳野川御普請愚考書』（山田家文書）より

藍作人の苦境

阿波での藍作は、江戸時代後期の弘化年間（一八四四～四七）に一旦ピークを迎えると、不況や天候不順などによって低落傾向が続く。その中で藍作の中心地のひとつである板野郡住吉村の組頭庄屋山田五郎左衛門は、事あるごとに建議書を郡代手代に提出し、村の藍作人達を守ろうとした。

ある建議書には「①十年前から夏ごとに洪水が続き、藍畠に仕込んだ肥料が流され、土地が痩せ藍の葉の生育が悪くなり不作が続いている。②肥料がさらに多く必要になるため肥料代が高騰し、肥料を畠に入れない者も出て、畠の手入れが行き届かなくなっている。③肥料代の支払いができず訴訟沙汰も増えている。④ついに藍作をやめて陸稲に転作する者が増えている。」と書き、藍作人の窮状を訴え、救済を求めている。

ここで言う肥料とは金肥の代表とされる干鰯（ほしか、干した鰯）であるが、鰯の不漁が続き、遠く北海道産の鰊（にしん）を代用品として使用するなど高騰が続いていた。金肥が行き渡った藍畠で、洪水は自然客土により藍作を有利にするものではなく、肥料を流し去ることによって土地が痩せ藍葉の生育が悪くなる原因ととらえていた。こうした金肥の存在がいかに藍作を左右するものであったかを知ることができる。



（建議書　藍作人救済の件）山田家文書

展示資料一覧

No.	表　題	年　代	備　考
吉野川沿岸に広がる藍畠			
1	藍田灌水の図(大原呑舟画)	天保14年(1843)	
2	パネル　藍づくりの一年	寛政元年(1789)	『藍作始終略書』より
3	パネル　藍作地方の図	明治５年(1872)	『阿州産藍之説』より
4	吉野川御普請愚考書	天保12年(1841)	山田家文書
5	板野郡西分村吉野川縁御普請所絵図	寛政４年(1792)	山田家文書
6	阿波麻植両郡一昨年以来相手懸候御用方申上帳(影印写本)	寛政２年(1790)	国文学研究資料館所蔵 蜂須賀家文書
7	藍畠(写真)		志摩家文書
8	板野郡竹瀬村藍地御見分指出帳	宝暦14年(1764)	キノウ00081
9	乍恐奉願上覚(吉野川川成癒上地に付村境散乱の件)	文政２年(1819)	イヌフ00943
10	新用水記録	明治３年(1870)	林家文書(石井町)
吉野川と藍屋敷			
11	(志摩家家相図)	(明治)	シマケ00043
12	志摩家屋敷(写真)		志摩家文書
13	(木内家屋敷図)	(近世)	キノウ01007
14	板野郡住吉村分間図	(文化)	山田家文書
15	板野郡上分西中富村より同郡下分板東村谷川迄吉野川絵図	嘉永７年(1854)	山田家文書
16	奉願上証(藍寝かせ床として納屋借受証)	明治７年(1874)	ナカサ00036
17	預り申葉藍之事	享保12年(1727)	イヌフ00716
18	板野郡之内東中富村川成改帳	寛文６年(1666)	イヌフ00070
19	葉藍手作並買藍俵数〆目付帳	正徳２年(1712)	イヌフ00977
20	藍屋敷模型		石井町所蔵
山田五郎左衛門の建議			
21	申上覚(北新居村兵次郎肥料代貸し付の件)	(近世)	ヤマ202396
22	申上覚(凶作に付、肥料代貸借の件)	(近世)	ヤマ202395
23	(建議書、天候不順に付藍作人窮状)	(近世)	ヤマ202425
代金回収に苦しむ阿波藍商			
24	邦介(書簡・藍仲間約定・代金未払いの紺屋へ出荷停止の件)	(天保期か)	キノウ01783
25	国介(書簡・売掛金回収のための公訴の件)	(天保期か)	キノウ01802
藍玉の船積送			
26	覚(肥前平戸へ葉藍積み送り報告)	嘉永２年(1849)	ナカサ00025
27	覚(備前へ葉藍積み送りに付、改め所切手下付願)	(明治5年)(1872)	ナカサ00012
28	(弁才天村観音丸海賊遭難の件)	明治７年(1874)	ナカサ00358
29	浦手形(別宮浦船明石前浜浦にて破船の件)	嘉永６年(1853)	森家文書(金塚家)
藍仲間の古文書			
30	藍仲間株式再興規定連印帳之写	嘉永５年(1852)	イノウ07102
31	株式譲渡証文之事(江戸藍仲間株の件)	文化９年(1812)	林家文書(石井町)
32	建白写(商法方の件)	明治３年(1870)	イノウ05151

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

藍の花

第四十五回　企画展
「吉野川と阿波藍」
平成二十四年十月二十三日

編集・発行　徳島県立文書館
〒七七〇-八〇七〇 徳島市八万町向寺山
電　話 〇八八-六六八-三七〇〇

印　刷　株式会社 教育出版センター
〒七七一-〇二二八 徳島市川内町平石流通団地二七
電　話 〇八八-六六五-六〇六〇